

日本人のスピリチュアリティ

— 仏教の視点から —

A Buddhist Perspective on Japanese Spirituality

平林二郎
HIRABAYASHI Jiro



宗教観、無宗教、仏教、『神神の微笑』、『日本の靈性』

Key words: Religious view, Irreligion, Buddhism, *The Smile of the Gods*, *Japanese Spirituality*

Abstract

The purpose of this paper is to discuss what Japanese spirituality is. Most Japanese people frequently visit temples and/or shrines, although they consider themselves as “irreligious” or “having no interest in religion”. I try to investigate what these attitudes mean. Firstly, using the results of the surveys of religious consciousness, I analyze the religious behavior of Japanese people. Secondly, in the Meiji and Taisho periods, Japanese people translated the English word “religion” as *Shūkyō* (宗教). I discuss the influence of this translation upon the Japanese mind. Finally, focusing on some representative works on religion of modern Japan, especially Ryūnosuke Akutagawa’s *The Smile of the Gods* and Daisetz T. Suzuki’s *Japanese Spirituality*, I inquire into Japanese spirituality. As a result of these analyses, I conclude that the basis of the thought of Japanese spirituality consists in Buddhism, which has been “re-created” as a new tradition by Japanese culture.

1. はじめに

日本人の多くは宗教的なものにひかれ何らかの宗教行事に参加しているにもかかわらず、自らを無宗教だと考えている。本稿は、日本人が称する無宗教とは何かを検討し、近代になって広く使われはじめた“宗教”という言葉が日本人に与えた影響を振り返るとともに、その時代を代表する著作にみられる宗教観に焦点を当て日本人のスピリチュアリティ¹⁾とは何かを考察するものである²⁾。

2. 日本人は無宗教か

日本人と宗教の関係を扱った論文³⁾や書籍⁴⁾の多くが何らかの形で無宗教に言及している。また、本稿を執筆するきっかけとなったシンポジウム「日本人のスピリチュアリティ—仏教、キリスト教、イスラームからみた日本文化—」においても、無宗教は重要な論点の1つとなっていた⁵⁾。したがって、まず日本人のスピリチュアリティを明らかにする上で無視できない主題の1つであると考えられる日本人の「無宗教」について考察を行っていきたい。

2. 1. 日本人の宗教行動

日本人が自らを無宗教であると称する際に「こどもが生まれれば神社に行き、結婚式は教会で挙げ、葬式はお寺に頼む」という決まり文句が用いられる⁶⁾。それでは、日本人は実際に如何なる宗教行動を執っているのか考察を行っていきたい。

日本では毎年約9000万人以上が初詣⁷⁾のために寺社を訪れており、2013年の三ヶ日だけでも、明治神宮には約313万人、成田山新勝寺には約300万人もの参拝者が訪れている⁸⁾。また、成田山新勝寺は1年間に約1300万人の人によって参拝されており⁹⁾、この数はヴァチカンの約660万人¹⁰⁾や、メッカの約200万人¹¹⁾を上回っている。

初詣を含めた日本における宗教的年中行事の実施率は、小谷みどり(2007)によれば、以下のようになっている¹²⁾。

宗教行事	初詣	バレンタイン	花祭り	お彼岸	お盆	クリスマス
割合	76.4%	35.1%	2.6%	61.8%	74.0%	63.2%

(小谷みどり(2007) 図表1 年中行事の実施率(複数回答) p.6 参照)

この調査結果から、初詣、お彼岸、お盆、クリスマスは半数以上の人によって行われており、多くの宗教的年中行事が日本に定着していることがわかる¹³⁾。

また、近年調査されたNHK放送文研究所(2014)「第9回「日本人の意識」調査(2013)結果の概要」によっても、宗教・信仰に関係することは何も行っていない、と答えた人の割合は7.5%¹⁴⁾という低い割合であった。

したがって、これらの調査結果から、日本人は如何なる宗教の聖地よりも多く寺社に参拝し、何らかの宗教的年中行事に参加していると考えられる。

2. 2. 日本人の何割が無宗教か

次に、日本における無宗教者の割合を考察してみたい。

小谷みどり（2007）によれば、2006年の宗教意識調査では「何か特定の宗教や宗派を信仰しているか」という質問に対して44.2%の人が「信仰していない」と回答し、最も多かったという結果が示されている¹⁵⁾。また、西久美子（2009）による2008年の宗教意識調査（複数回答不可）においても「あなた自身は、何か宗教を信仰していますか」という質問に対して約半数の49.4%が「宗教を信仰していない」と回答したという結果が提示されている¹⁶⁾。この他、「第9回「日本人の意識」調査（2013）結果の概要」NHK放送文研究所（2014）によっても、「宗教とか信仰とかに関連すると思われることから、あなたが信じているものがありますか」という質問（複数回答可）が行われており、「何も信じていない」と回答した人の割合は以下のように変遷している。

年度	1973	1978	1983	1988	1993	1998	2003	2008	2013
割合	30.4%	23.9%	23.3%	25.8%	24.3%	29.5%	25.6%	23.5%	25.9%

（NHK放送文化研究所（2014）「第9回「日本人の意識」調査（2013）結果の概要」p.15）

これらの調査結果から、たしかに、日本人の4分の1から半数は特定の宗教を持たない、もしくは何も信じていない、無宗教〔者〕であるかのように見える。

しかし、これらの調査方法の違いと意識調査結果は日本人の特殊な宗教的特徴を浮き彫りにしている。小谷みどり（2007）による調査では質問に「特定の宗教や宗派」という言葉が入っており、西久美子（2009）による調査では信仰している宗教の選択肢に仏教、神道、プロテスタント、カトリック、イスラム教、その他の宗教、宗教を信仰していない、無回答などを挙げているが複数回答不可の調査を行っている。一方、NHK放送文化研究所（2014）の調査は信仰している対象の選択肢として神、仏、聖書・経典、あの世、奇跡、信じていない、その他、無回答などを挙げ複数回答が可能な方式で調査を行っている。その結果、限定的な質問や方法で調査を行った小谷みどり（2007）・西久美子（2009）では約半数の人が信仰はないと答え、一方、複数回答が可能な方法で調査を行ったNHK放送文化研究所（2014）では宗教を信仰していない人の割合が前者の半分の約4分の1にまで減少しているのである。

つまり、日本人の宗教意識調査では同じような質問内容でも特定の宗教を選ぶ質問か、そうでないかによって、結果に重大な差異が生じているのである。

2. 3. 日本人が称する無宗教

2. 1. 日本人の宗教行動から、日本人はどの宗教の聖地よりも多く寺社に参拝し、何らかの宗

教的年中行事に参加していると明らかになった。また、2. 2. 日本人の何割が無宗教かから、日本人の宗教意識調査では同じような質問内容でも特定の宗教を選ぶ質問か、そうでないかによって、結果に重大な差異が生じているとわかった。したがって、これらの考察結果から、日本人は宗教的なものにいくつも関わっているからこそ、いずれかの宗教を選ぶことができず（あるいは、選ぶことをせず）、自らを無宗教だと称していると考えられる。

3. 日本人と“宗教”

それでは、日本人はいつから自らを「無宗教」だと称しはじめたのか。その要因となっている近代という時代と、“宗教”という言葉に焦点を当て考察を行っていきたい。

近代、明治政府は天皇を中心とした集権国家を目指すために神道を国教にしたいと考えつつも¹⁷⁾、英仏米などの列強との不平等条約を改正するためにキリスト教の布教を認めなければならず¹⁸⁾、大日本帝国憲法第28条によって「信教の自由」を保証した。

近代は日本がこのような宗教に関連する問題にたびたび直面した時代であり、日本人は国際社会のなかで自らの地位を築くために“神道・仏教・キリスト教などを含めた新たなる概念”を持った言葉の必要に迫られていた¹⁹⁾。そこで宗教という言葉が religion の訳語として採用し²⁰⁾ 定着させた。これが我々の使用する“宗教”という言葉のはじまりであるとされる²¹⁾。

では、この宗教と religion という言葉がそれぞれ何を意味しているのか、その原義を考察することで、“宗教”という言葉が日本人に与え影響を明らかにしていきたい。

3. 1. 中国仏教で使用される宗教

宗教という言葉がはじめて使用されたのは中国仏教であり²²⁾、『望月仏教大辞典』によれば、宗教は「宗の教旨、或は宗即ち教の意。又宗との併称」とある²³⁾。この宗という言葉は仏教文献で使用される場合²⁴⁾、実証された真理、確定された結論、一般に承認されること、あまねく知られたことなどを意味するサンスクリットの *siddhānta-*、*prasiddhi-* の訳語、もしくは翼、党派、意見、見解、主張を意味する *pakṣa-* の訳語などとして使用される。教という言葉は仏教で使用される場合²⁵⁾、教え、聖言、聖典、経、人々に教えすすめること、定まった教義、意見などの広義で使用され、これに対応するサンスクリットとしては *sāsana-*、*āgama-*、*śāstra-*、*sūtra-* などが想定される。つまり、元来の宗教という言葉は、(仏教における)「それぞれの思想的見解を説く教え」、「究極の真理と、それを人に伝えるための教え」、「宗旨」などを意味していると考えられる²⁶⁾。

3. 2. religion と religio

一方、西欧で使用される religion はラテン語の名詞 *religio*²⁷⁾ をもとにしている。この *religio* の語源については2説あると考えられている²⁸⁾。まず、哲学者のキケロ²⁹⁾ は、*religio* の語源を接頭

辞 *re-* (再び) と動詞の *legere* (集める、つまむ、選ぶ、読むなど)³⁰⁾ からなる *relegere* (再び集める、再読するなど)³¹⁾ だとしている。一方、セルウィウス³²⁾、ラクタンティウス³³⁾、アウグスティヌス³⁴⁾ は接頭辞 *re-* (再び) と動詞の *ligare* (結びつける)³⁵⁾ からなる *religare* (きつく縛る)³⁶⁾ を *religio* の語源だと考えている。つまり、*religio* という言葉の語源は *relegere* が意味する「再読などの動作」から、「(宗教的な) 儀式、慣習」という意味で使用されるようになったと解釈するか、もしくは、*religare* の「きつく縛る」という動作から「神と人を結びつける」という意味で使用されるようになったと解釈される³⁷⁾。したがって、*religion* の語源が 2 説のいずれであったとしても、西欧文化の概念、もしくは、神という観念が付随しているのである。

3. 3. religion が日本人に与えた影響

普段、我々が使用している“宗教”という言葉は“神道・仏教・キリスト教などを含めた概念”であり、“*religion*”もオックスフォード英語辞典³⁸⁾によれば“*The belief in and worship of a superhuman controlling power, especially a person God or gods: 'ideas about the relationship between science and religion'*”となっている。

たしかに、宗教を *religion* の訳語として使用したことで、上記で考察したような元来の仏教で使用される宗教という言葉や概念は薄れている³⁹⁾。しかし、*religion* = 宗教という言葉概念が広まって行くことで、元来の *religio* が持つ「神と人を結びつける」という語感や、オックスフォード英語辞典にある‘*especially a person God or gods*’という、かつての日本にはなかった概念も広まっていった⁴⁰⁾。この時、日本人は初めて「一神教か、多神教か」の選択、ひいては、「仏教か、神道か、キリスト教か」の選択に苛まれるようになったのである。

日本人は古くから初詣や村祭を行い神道と関わり、また、お彼岸やお盆の季節に墓参りに行くなど仏教と関わっていた。そこに、近代になって“宗教”という西欧の概念が付随した言葉・概念が入ってきたことで、個人が主体的に「仏教か、神道か、キリスト教か」を決断しなければならなくなった。しかし、多くの日本人はその決断を下さず、宗教を選択しないことによって自らを「無宗教」と称したのである。

つまり、日本人がいう無宗教は神殺しを行った西欧のような確信的な無宗教・無神論ではなく、宗教を選択しないことによる「無宗教」だと考えられるのである⁴¹⁾。

4. 近代日本人の宗教観

それでは最初に“宗教”による選択を迫られた近代の日本人はこの問題をどのように考えたのであろうか。当時を代表する著作である芥川龍之介の『神神の微笑』、および、鈴木大拙の『日本的靈性』にみられるに宗教観に焦点を当て、日本人のスピリチュアリティとは何かを考察してみたい。

4. 1. 芥川龍之介『神神の微笑』にみる宗教観

近代を代表する作家の一人である芥川龍之介は異文化の親和的受容に肯定的であり、このような姿勢は当時の国際的な視野を持った日本人の主流を占めるものであったと考えられている⁴²⁾。それでは、“宗教”についてはどうであったのか。芥川龍之介の日本文化論が表現されている⁴³⁾とされる『神神の微笑』⁴⁴⁾に焦点を当て考察を行っていきいたい。

『神神の微笑』は日本とキリスト教の接触を主題とした「切支丹もの」⁴⁵⁾と呼ばれる著作の1篇であり、その内容はキリスト教を布教するために来日した宣教師オルガンティノと老人（日本の古代神）との接触が中心となっている。

ある日、オルガンティノは3、4人の侍にキリスト教を布教し嬉しげに歩いていると、「日本の霊の一人」だという老人（古代神）に会う。老人は微笑を浮かべつつオルガンティノと一緒に歩きはじめ、「泥烏須もこの国へ来ては、きっと最後には負けてしまいますよ」と彼に語りかける。オルガンティノは「泥烏須に勝つものはない筈です」と老人に答える。すると、老人は、中国の牽牛織女が彦星・棚機津女として日本に根付き、「舟」という漢字は「シュウ」と呼ばれることはなく「ふね」と呼ばれ続けていると言い、空海・小野道風・藤原佐理・藤原行成は支那の墨蹟を手本にしていたが、いつしか王羲之でも褚遂良でもない日本の文字を書きはじめた、といった例を挙げ海外の文化が日本を征服できなかったことを述べる。

そして老人はさらに仏教についても同様であるという。

仏陀の運命も同様です。が、こんな事を一々御話するのは、御退屈を増すだけかもしれません。ただ気をつけて頂きたいのは、本地垂迹の教の事です。あの教はこの国の土人に、大日靈貴は大日如来と同じものだと思わせました。これは大日靈貴の勝ちでしょうか？ それとも大日如来の勝ちでしょうか？ 仮りに現在この国の土人に、大日靈貴は知らないにしても、大日如来は知っているものが、大勢あるとして御覧なさい。それでも彼等の夢に見える、大日如来の姿の中には、印度仏の面影よりも、大日靈貴が窺われはしないでしょうか？ 私は親鸞や日蓮と一しょに、沙羅双樹の花の陰を歩いています。彼等が随喜渴仰した仏は、円光のある黒人ではありません。優しい威厳に充ち満ちた上宮太子などの兄弟です。 — (芥川龍之介 (1987) pp.387-388)

つまり、芥川龍之介は、本地垂迹説⁴⁶⁾はたしかに日本人に「大日靈貴⁴⁷⁾は大日如来⁴⁸⁾の権現⁴⁹⁾だ」と思わせた、しかし、それでも日本人が思い浮かべる大日如来は日本的な大日靈貴のような姿である、と示唆しているのである。そしてさらに、日本人が思い浮かべる仏はインドの釈迦牟尼ではなく、聖徳太子だと言い、日本人が信仰している仏教はインドや中国の仏教ではなく、日本化した仏教だと言うのである。

上記の台詞の後に、芥川龍之介はオルガンティノと老人の会話に自分の日本論を仮託し以下の

ように語らせている。

オルガンティノは口を挟んだ。

「今日などは侍が二三人、一度に御教に帰依しましたよ。」

「それは何人でも帰依するでしょう。ただ帰依したと云う事だけならば、この国の土人は大部分が悉達多の教えに帰依しています。しかし、我々の力と云うのは、破壊する力ではありません。造り変える力なのです。」(中略)

「しかし泥烏須は勝つ筈です。」(中略)

老人はだんだん小声になった。

「事によると泥烏須自身も、この国の土人に変わるでしょう。支那や印度も変わったのです。西洋も変わらなければなりません。我々は木々の中にもいます。浅い水の流れにもいます。薔薇の花を渡る風にもいます。寺の壁に残る夕明りにもいます。どこにでも、またいつまでもいます。御気をつけなさい。御気をつけなさい……」

(芥川龍之介(1987) pp.388-390 下線筆者)

ここで芥川龍之介は、日本〔の風土〕が思想、文化、そして宗教までも変容させてしまう力、すなわち〈造り変える力〉を有していること述べ、また、仏教の日本的な変容の歴史から、キリスト教も日本的に変容される(されなければならない)未来を暗示している。つまり、芥川龍之介の宗教観としては、現時点の仏教とキリスト教の布教による勝ち負けが問題ではなく、将来、日本がキリスト教をどのように変容させるかにあつたと考えられるのである。

4. 2. 鈴木大拙『日本的靈性』にみる宗教観

鈴木大拙は *An Introduction to Zen Buddhism* や *Zen and Japanese Culture* など禅に関する著作を海外に向けて発信した近代を代表する仏教学者である。また、鈴木大拙は“靈性”という言葉をも“spirituality”の訳語として定着させた人物であり、彼の代表的著作である『日本的靈性』は、日本人の宗教意識が鎌倉時代の禅と浄土系思想によって顕現したと述べている。それでは、なぜ、鈴木大拙は鎌倉時代の禅と浄土系思想によって日本人のスピリチュアリティが顕現したと考えたのか、〈造り変え〉という視点から考察を行っていききたい。

4. 2. 1. 禅と日本

鈴木大拙は『日本的靈性』のなかで、日本的靈性の知性方面に当出したものが、日本人の生活の禅化であると論じ⁵⁰⁾、また、「禅が日本的靈性を表詮しているというのは、禅が日本人の生活の中に根深く食い込んでいるという意味ではない。それよりもむしろ日本人の生活そのものが、禅的であると言った方がよい」と言い切っている⁵¹⁾。それでは、なぜ鈴木大拙はこのように主張したのか、禅と日本人の関係に焦点を当て考察を行っていききたい。

まず、簡単に禅〔宗〕の変遷について振り返ってみたい。

禅はサンスクリット語の *dhyāna*-、もしくは、パーリ語の *jhāna*- の音写語である禅那を省略して禅としたものである。この *dhyāna*-、*jhāna*- の意味は「心を特定の対象にそそぎ、心が乱れたり散ったりしないように落ち着かせること」であり、インド仏教では釈尊にはじまり初期仏教の頃から重視された⁵²⁾。

この *dhyāna*- にはじまる禅が、北魏の時代に菩提達磨⁵³⁾ によって、壁に向かって坐り、仏と同じ清らかな心を備えていることを体得し、悟りを開くという「坐禅」として広められた。これが中国での禅宗のはじまりであり、菩提達磨は禅宗の祖師とされる⁵⁴⁾。

この菩提達磨による教えをもとに中国の禅宗は発展し変化して行く。元来、遍歴修行をしていた禅僧が、禅宗第四祖の道信（580-651）の頃から人里離れた山間で集団で修行を行うようになり、山里では大勢が乞食ができないことから、自給自足の生活をはじめようになる。ここでインドの仏教にはない、僧侶が生産にたずさわり勤労を重視するという考えがなされるようになる⁵⁵⁾。このような状況を踏まえ、馬祖道一（709-788）が禅を特殊な仏教の実践徳目とせず、日常生活がそのまま禅であることを説き大きな影響を与えた。そして、このような教えの系統から臨済義玄（?-867）は、坐禅によってあるがままの自己が仏そのものであること悟り、世間の偏見に満ちた束縛から解放されるという教えを説く臨済宗を開いた⁵⁶⁾。

次に日本である。日本に最初に禅を伝えたのは道昭（629-700）である。彼は653年に入唐し、玄奘から唯識を学び、慧滿から禅を学んだ。そして、660年に帰国した後、元興寺に禅院を建立し、そこで多くの人に禅を伝えたとされる⁵⁷⁾。また、804年に入唐した最澄（767-822）は、天台山修禅寺座主道邃、仏隴寺座主行滿より天台法華宗・天台円教菩薩戒を受け、さらに泰岳靈巖山寺の順暁より密教の法脈を、また天台山禅林寺の儵然から牛頭禅の法脈をそれぞれ受継いでいる。

しかし、飛鳥時代・奈良時代・平安時代に禅は広まらず、鎌倉時代になり、宗で禅を学んだ栄西（1141-1215）が臨済宗を開いたことによって、日本では禅宗が興ったと考えられている。その後、栄西の系譜で禅を学んだ道元が宗に渡り、天童山の如浄（1163-1228）に只管打坐⁵⁸⁾ を学び、日本に帰り永平寺を開いた。

以上が簡単な禅〔宗〕の変遷である。では、中国の禅と日本の禅はどのように違うのか、鈴木大拙の著述からその真意を探ってみたい。

鈴木大拙は中国において仏教は禅としては浸透せず、因果応報の説として広まったと言う。そして、漢人の思想や情緒で支配される国民にとっては考え方・感じ方に基づく禅よりも、論理的な善因善果説の方が効果的であった⁵⁹⁾ と述べ、一方、日本はインドを源とし北方系漢民族の間で実証性を獲得した禅と接触し、その漢民族の実践的理論性とインド民族的直覚性に自らの靈性の姿が映されることに満足を感じた⁶⁰⁾ と著している。

これは、中国では禅が仏教という「教え」ではなく、「説」として流行に乗り発達し、盛んになったが、中国の実際主義と仏教の論理は時としてさまざまな軋轢を生み出し⁶¹⁾、宗代に入ると念

仏禅・儒教・道教と融合し衰退してしまい、明・清の時代⁶²⁾にはほぼ見られなくなってしまったことを意図していると考えられる。

一方、日本では鎌倉時代、政治的新興勢力であり、常に死の覚悟をもって日常生活に臨まなければならない武士たちが、禅宗から禅の実践的理論と直感を学びはじめた。そして、室町時代には臨済宗が五山文学⁶³⁾を花開かせ、また、雪舟⁶⁴⁾や明兆⁶⁵⁾などの水墨画家を輩出し、中央の貴族の生活などとも結び付き、禅が日本文化に浸透していったことを意図していると考えられる。

つまり、鈴木大拙の「日本人の生活そのものが、禅的である」という表現には、中国は禅を仏教の「説」と考え衰退させ、日本は禅を「文化として〈造り変え〉」、いつしか禅文化そのものを日本的なものとして捉えるようになったという考えがその一端を担っているのである。

4. 2. 2. 日本の浄土系思想

鈴木大拙は『日本の靈性』のなかで「日本的靈性の情性方向に顕現したのが、浄土系の経験である」⁶⁶⁾と弁じ、また、「真宗の中に含まれていて、一般の日本人の心に食い入る力をもっているものは何かと言うに、それは純粹他力と大悲力とである。靈性の扉はここで開ける」⁶⁷⁾と明言している。では、なぜ鈴木大拙は浄土系思想が日本によって飛躍し、日本人の情性として顕現したと述べたのか考察を行ってみたい。

浄土系思想は紀元前2世紀頃の北西インドでアミダ仏に関連する経典（*Sukhāvativyūha*）が作成されたことにはじまるとされる⁶⁸⁾。この *Sukhāvativyūha* とは漢訳では『無量寿経』と『阿弥陀経』を指す。『無量寿経』には、法蔵菩薩が48願をたて、長い間、思惟・修行しアミダ仏となったことが説かれている。また、『阿弥陀経』には、極楽世界の様子や、そこで教えを説くアミダ仏が讃歎され、アミダ仏を信じてその名を唱えることが説かれている。

このアミダ仏への信仰はシルクロードを通り中国に入り、北魏の曇鸞（476-542）によって浄土往生を願う念仏と龍樹や世親の仏教教理学が結びつけられた。この曇鸞に影響を受けた道綽（562-645）が『観無量寿経』⁶⁹⁾を註釈した『安樂集』を著し専修念仏⁷⁰⁾を説き、道綽の弟子である善導（613-681）が長安であらゆる人に専修念仏を広め中国浄土教を大成した。

日本では、平安中期に天台宗の源信（942-1017）が浄土・念仏・往生・地獄などに関する要文を項目別に編集した『往生要集』を著し、後の浄土教の成立に貢献した⁷¹⁾。また、平安中期には、比叡山の僧であった良忍（1072-1132）がアミダ仏の靈頭を受けて、一人が往生すれば衆人が往生するという融通念仏を説き、民衆に広めた⁷²⁾。

鎌倉時代に入り、道綽や善導の教えを独自に解釈した法然（1133-1212）は『選択集』を著し浄土宗を開いた。その後、法然の弟子である親鸞（1173-1262）が法然の教えを継承しつつも独自の道を歩み浄土真宗を開いた。

このような変遷のなか鈴木大拙はインドと中国の浄土系思想にはないものとして、日本の浄土系思想の「真宗的横超経験」と「弥陀の絶対他力的救済観」を上げている⁷³⁾。

それではこの両者が何を意味しているか考察を行ってみたい。

「真宗的横超経験」とは親鸞の著作である『教行信証』などに説かれる「横超」を指し、「横」は「他力浄土門」、「超」は「頓教」を意味しているとされる⁷⁴⁾。つまり、「横超」とは、アミダ仏の本願によって浄土に往生し（浄土門）、一定の段階をふまず直接的・飛躍的に悟りを得る（頓教）ということなのである。

鈴木大拙はこのような真宗的横超経験について「絶対者の大悲は悪によりても遮られず、善によりても拓かさざれるほどに、絶対は無縁—即ち分別を超越しているということは、日本的靈性でなければ経験せられないところのものである」⁷⁵⁾と述べている。つまり横超は豎超⁷⁶⁾や豎出⁷⁷⁾が前提である他の大乘教団には見られない日本独自のものであると言うのである。

次に「弥陀の絶対他力的救済観」についてである。インドの浄土系思想には仏教の道理を知らない、迷いの生活を送る人々（凡夫）がアミダ仏の名を唱えるだけで容易に極楽浄土へ往生できるとは考えられない部分がある⁷⁸⁾。その例を以下に挙げてみたい。

nāvaramātrakeṇa śāriputra kuśalamūlenāmitāyūṣas tathāgatasya buddhakṣetre sattva
upapadyante | (Kotatsu Fujita. (2011). p.89)

シャーリプトラよ。生ける者どもは僅かばかりの善行によって無量寿如来の仏国土にうまれることはできない。(中村元他(1990)(下)、『阿弥陀経』pp.126-127)

このような部分は他の浄土系経典にもみられ⁷⁹⁾、中国の浄土系思想でも最悪の凡夫が念仏を唱えるだけで浄土に往生できるかについては問題があると考えられている⁸⁰⁾。

しかし、親鸞はこの問題について、罪深い人間が祈ることによってアミダ仏が救ってくれるのではなく、アミダ仏が衆生を救おうとした願いを振り向ける⁸¹⁾と考え、自分で修行をする（自力）ではなく、アミダ仏の大悲である誓願とその力（他力）によって極楽浄土に往生すると説いたのである。

つまり、親鸞は、インドで生まれ中国を経由して伝わった浄土系思想を、日本で「アミダの大悲と絶対他力によって誰もが救われる教え」として〈造り変え〉た。そして、このような教えが広まり、根付いたことを鈴木大拙は情性の顕現と表現しているのである。

5. 日本人のスピリチュアリティ

本稿を整理すれば、日本人は如何なる宗教の聖地よりも多く寺社に参拝し、定期的に宗教的年中行事に参加している。そして、日本人の多くは仏教・神道など複数の宗教に関わっていることを理由に、特定の信仰への言及を避け、自らを「無宗教」だと称していると考えられる。

日本人がこのような信仰の選択に苛まれるようになった要因は、近代になってキリスト教の影響を受けた religion という言葉が宗教と翻訳されたことにある。これは、すべての宗教を含めた“religion = 宗教”という言語概念が根付くと同時に、religion が有する神観念によって、日本人

が「一神教か、多神教か」の選択を迫られたからである。

日本人が初めて宗教の選択を迫られた近代、芥川龍之介は『神神の微笑』で日本〔の風土〕が仏教を〈造り変え〉たことに言及し、キリスト教についても〈造り変え〉られるであろう未来を示唆した。また、鈴木大拙は日本〔の風土〕が禅と浄土系思想を日本人の知性・情性として〈造り変え〉、それらが日本でだけ広まった理由を述べた。

これらをまとめれば、日本人が称する「無宗教」は、西欧の確信的な無宗教・無神論ではなく、宗教を選択をしないことによる「無宗教」だと考えられる。そして、日本人のスピリチュアリティを仏教の視点から見れば、日本人が仏教的なのではなく、「無宗教」だと言えるほどに〈造り変えられた〉仏教が日本的なのであると考えられる。

注

- 1) 近年、スピリチュアルが形容するものとしてスピリチュアルケア・スピリチュアル教育・スピリチュアルセラピー・スピリチュアル占い・スピリチュアル経営など、その使用範囲は多種多様な広がりを見せている。このような文化現象はスピリチュアリティ文化・霊性文化とよばれ現在研究が進められている。(櫻尾直樹(2012) pp.1-2 参照。)筆者は、メディアをはじめ多くの人々がスピリチュアル・スピリチュアリティという言葉を使用する背景にスピリチュアル・スピリチュアリティという言葉を使用し、宗教という言葉が持つ拘束的・排他的なイメージから距離をとり、そこに普遍性や非日常性を持たせようとしているのではないかと考えている。(葛西賢太(2002) pp.124-127 参照。)本稿の目的は“宗教”という言葉・概念が日本人に与えた影響、および、近代日本人の仏教観・宗教観を考察することであり、スピリチュアル・スピリチュアリティという術語を上記のような広範な意味で使用する意図はない。それゆえ、“spirituality”という言葉を“霊性”と翻訳した鈴木大拙の考えに従い、“スピリチュアリティ”を“宗教意識”・“個別の宗教を宗教たらしめているはたらき”として使用する。(鈴木大拙(1972) p.17 参照)
- 2) 本稿は2014年6月14日に立教大学で開催されたシンポジウム「日本人のスピリチュアリティ—仏教、キリスト教、イスラームからみた日本文化—」の発題内容を踏まえ論文としてまとめたものである。
- 3) 日本人と無宗教の関係を扱った論文は多数ある。本稿では執筆する際に参照した論文のうちいくつかを紹介したい。小泉晋一(2000)は、何らかの宗教を信仰している学生と無宗教の学生について死生観を比較している。濱田陽(2001)は、結婚式に焦点を当て、無宗教者と教会の関係を考察している。岩井洋(2004)は、「無宗教」や「無神論」といった表現が生まれた背景を探り、グローバル化のなかで日本宗教を捉えようと試みている。寺沢重法(2013)は、宗教は社会活動を促すものかについて、さまざまな宗教を信仰する人と無宗教の人の傾向を分析している。
- 4) 現代日本人と無宗教の関係を扱った代表的な書籍としては阿満利麿(1996)『日本人はなぜ無宗教なのか』、島田裕巳(2009)『無宗教こそ日本人の宗教である』、ネルケ無方(2014)『日本人に「宗教」は要らない』などがある。
- 5) シンポジウムの様子は立教大学異文化コミュニケーション学部にデータで保存されている。

- 6) 岩井洋 (2004) p.79、および、島田裕巳 (2009) p.25 参照。
- 7) 2009 年まで、初詣の全国ランキングが警視庁から発表されていたが、参拝者の集計方法に問題があるとされ、現在このような発表はとりやめとなっている。2009 年以前のデータとしては宗教情報リサーチセンター HP「宗教記事年表 (国内)」を参照した。
(http://www.rirc.or.jp/xoops/modules/xxxxx02/index.php?start=0&order_item=xgdb_date&order=asc&order_item=xgdb_date&order=desc)
- 8) MAPPLE 観光ガイド「おすすめ初詣スポット」2014 参照。
(http://www.mapple.net/sp_newyear/ranking_01.asp)
- 9) 中山和久 (2006) p.396 参照。
- 10) CNN Money の “Vatican tourism triples for new Pope” (January 3, 2014) という記事によれば昨年ヴァチカンを訪問した旅行者の数は 660 万人であり、2012 年のおよそ 230 万人の約 3 倍となっているとある。(<http://money.cnn.com/2014/01/03/news/pope-vatican-tourism/>)
- 11) 坂本勉 (2009) 参照。
- 12) この他の年中行事の実施率は以下のものである。

宗教行事	節分	ひな祭り	お彼岸	端午の節句	七夕	月見	なし
割合	83.8%	58.4%	61.8%	52.5%	68.8%	44.3%	2.0%

小谷みどり (2007) 「日常生活における宗教行為と意識」 p.6.

- 13) この他、小谷みどり (2007) によれば、現在如何なる宗教行事も行っていない人の割合は 2.0% となっている。また、こどもの頃の実施率を見ると何も行っていない人の割合は 0.4% となっており、ほぼすべての日本人が何らかの行事を体験していると言える。(p.6 参照)
- 14) NHK 放送文化研究所 (2014) p.15 参照。
- 15) 小谷みどり (2007) p.4 参照。
- 16) 西久美子 (2009) p.78 参照。
- 17) 阿満利磨 (1996) p.85 参照。
- 18) このような一例としては日米修好通商条約第 8 条に以下のような諸規定があることを挙げたい。
磯前順一 (2003) p.33 参照。
〔1〕日本に在る亜米利加人自ら其国の宗法を念し礼拝堂を居住場の内に置き障りなし。竝に其建物を破壊し、亜米利加人宗法を自ら念するを妨る事なし。
〔2〕亜米利加人、日本人の堂宮を毀傷する事なく、又決して日本神仏の礼拝を妨げ神体仏像を毀る事あるへからず。
〔3〕双方の人民互いに宗旨に付ての論争あるへからず。
このようにキリスト教の布教は不平等条約の改正において重要な位置にあったと言える。
- 19) 阿満利磨 (1996) pp.73-75 参照。
- 20) 磯前順一 (2003) によれば religion という言葉がはじめて翻訳されたのは日米修好通商条約においてであり、その際は religion を宗旨などと訳していたとされる。(p.33) また、宗教という訳語が使用された初期の例として、明治元年 (1868) アメリカ公使によるキリシタン禁止の高札に対する抗議書、明治 2 年 (1869) に北ドイツ連邦と締結した通商条約、明治 5 年 (1872) の島地黙雷の「三条教則批判建白書」などがあるとしている。(pp.34-35)
この他、石井研士 (2002) によれば「日本の「宗教」が〈宗教〉を表すようになったのは、1869 年のドイツ北部連邦との修好通商条約第 4 条に記されていた “Religionsübung” の訳語から定着」とある。(p.24)

- 21) 阿満利磨 (1996) pp.73-75、および、磯前順一 (2003) pp.29-38 参照。
- 22) 磯前順一 (2003) p.29 参照。また、望月信亨 (1960) 『望月仏教大辞典』は宗教という言葉の出典として『法經録』や、中国人による仏教經典の註釈文献 (『法華經玄義』、『華嚴五教章』など) を挙げている。(pp.2229-2230)
- 23) 望月信亨 (1960) 『望月仏教大辞典』 pp.2229-2230 参照。
- 24) 望月信亨 (1960) 『望月仏教大辞典』 pp.2201-2202、および、中村元 (2001) 『広説仏教語大辞典』 pp.755-756、【宗】の項目を参照。
- 25) 望月信亨 (1960) 『望月仏教大辞典』 p.559、および、中村元 (2001) 『広説仏教語大辞典』 p.279、【教】の項目を参照。
- 26) 中村元 (2001) 『広説仏教語大辞典』の宗教という項目 (p.760) には、以下の4つの意味があるとされる。
- ① それぞれの思想的見解 (宗) を説く教え。系統。部門。
 - ② 言語では表示されない究極の真理と、それを人に伝えるための教え、宗と教え。
 - ③ 自己が奉じる教え。宗旨。
 - ④ 教宗ともいう。
- 27) 英語の “religion” の語源は Oxford Dictionaries によれば次のようになっている。
Middle English (originally in the sense ‘life under monastic vows’): from Old French, or from Latin *religio* (*n-*) ‘obligation, bond, reverence’, perhaps based on Latin *religare* ‘to bind’. (<http://www.oxforddictionaries.com/definition/english/religion>)
- 28) 石井研士 (2002) p.24 参照。その他、Online Etymology Dictionary は religion の語源として “*religiens*” (注意する) の可能性があることに言及している。しかし、本稿は religion の言語学的な考察を主眼に置いておらず、また、紙幅に制限があることからここでは扱わなかった。
(http://www.etymonline.com/index.php?allowed_in_frame=0&search=religion)
- 29) *Marcus Tullius Cicero* (106BC-43BC) 共和制ローマ時代の哲学者、政治家、文筆家。
- 30) *A Latin Dictionary*, *lego* (pp.1047-1048) 参照。
- 31) *A Latin Dictionary*, *relego* (p.1555) 参照。
- 32) *Maurus Servius Honoratus* (4世紀後半から5世紀前半) 文法学者。
- 33) *Lucius Caecilius Firmianus Lactantius* (240頃-320年頃) コンスタンティヌス1世の家庭教師、助言者。
- 34) *Aurelius Augustinus* (354-430) ヒッポのアウグスティヌス、古代キリスト教の神学者。
- 35) *A Latin Dictionary*, *ligo* (pp.1064-1065) 参照。
- 36) *A Latin Dictionary*, *religo* (p.1577) 参照。
- 37) 石井研士 (2002) p.24 参照。また、*A Latin Dictionary* における *religio* の解説は以下のようになっている。(pp.1556-1557)
- “Concerning the etymology of this word, various opinions were prevalent among the ancients. Cicero (N. D. 2, 28, 72) derives it from *relegere*, an etymology favored by the verse cited ap. Gell. 4,9,1, *religentem esse oportet, religiosum nefas*; whereas Servius (ad Verg. A. 8, 349), Lactantius (4, 28), Augustine (Retract. 1, 13), *al.*, assume *religare* as the primitive, and for this derivation Lactantius cites the expression of Lucretius (1, 931; 4, 7): *religionum nodis animos exsolvere*.”
- 38) Oxford Dictionaries (<http://www.oxforddictionaries.com/definition/english/religion>)

- 39) 仏教で使用される宗教という言葉の詳細は広辞苑に掲載されていない。
- 40) 『広辞苑』の宗教という項目には、「(religion) 神または何らかの超越的絶対者、あるいは卑俗なものから分離され禁忌された神聖なものに関する信仰・行事」とあり、宗教が religion の訳語であることに重点が置かれている。
- 41) 山折哲雄 (2007) は日本人のこのような心情を「無神論的心情」とし、この心情は歴史的にみれば「一種の宗教外圧に屈して生みだされた自己認識の産物である」と指摘している。また、山折はキリスト教が入ってきたことが「汝の宗教は何であるか」、「汝の宗教は一神教であるのか多神教であるのか」、および、「キリスト教徒か仏教徒か」を迫るはじまりであったとし、この問いに対して日本人は信仰を主体的に選びとっていないとの認識から、自らを「無神論者」と位置づけるほかなかったとしている。(pp.4-7)
- 42) 田口麻奈 (2011) p.113 参照。
- 43) 田口麻奈 (2011) p.113、および、笠井秋生 (1968) p.59 参照。
- 44) 『神神の微笑』が最初に発表された際 (『新小説』、1922.1) の表題は「神々の微笑」であり、創作集『春服』(1923.5) に所収される際には四百字詰原稿用紙約 6 枚に相当する部分が削除されている。(笠井秋生 (1968) pp.63-64 参照)
- 45) 笠井秋生 (1968) は「芥川龍之介の歴史小説はその材料及び背景に従って、王朝物、切支丹物、江戸時代物、明治開花期物、中国物、という風に分類されるが、その基準は必しも同一ではない。特に「切支丹物」に於てそれは著しい。」としている。(p.57)
- 46) 日本の神々は、仏教の如来・菩薩・天が化身として日本に現れたものであるとする考え。
- 47) 大日靈貴 (おおひるめむち) は天照大御神 (あまてらすおおみかみ) の別称。
- 48) 大日如来 (摩訶毘盧遮那如来) の原語はサンスクリット語で *Mahāvairocana* (偉大な輝くもの) であり、偉大な輝くものを意味している。もとは太陽の光明のことであったが、後に宇宙の根本の仏の呼称となったと考えられている。(中村元 (2001) p.1130 参照)
- 49) 仏教の如来・菩薩・天が化身して日本の神々として現れること。
- 50) 鈴木大拙 (1972) p.25 参照。
- 51) 鈴木大拙 (1972) p.22. 1-2.
- 52) 中村元 (1975) p.321、および、廣澤隆之 (2002) p.214 参照。また、禅は、大乘仏教では六波羅蜜という修行のなかに禅定波羅蜜として体系づけられ重要視されている。
- 53) 菩提達磨 (*bodhidharma*) は東魏の楊銜之の『洛陽伽藍記』や、唐の道宣による『続高僧伝』などにその名が見られる。しかし、その生没年や、生まれについては不明な点が多く伝説的な人物であると考えられている。『望月仏教大辞典』(pp.4670-4671) によれば生まれは「南天竺婆羅門國王の第三子、一に波斯國、或は香至國王の第三子とす」とある。
- 54) 中村元 (2001) 『広説仏教語大辞典』 p.1033、禅宗の項によれば、禅宗は 521 年または 527 年にはじめて中国に伝えられたとある。たしかに「禅宗」を伝えた人物は菩提達磨であろうが、「禅」はそれ以前に中国に伝えられている。以下にその例を挙げたい。『坐禅三昧経』など禅の内容を伝える経典が鳩摩羅什 (*kumārajīva*, 350-409 または 344-313) によって漢訳されている。また、廬山の慧遠 (334-416) は『般舟三昧経』を抛り所とした禅を行っている。この他、『望月仏教大辞典』の曇摩耶舎 (*dharmayaśas*) の項 (pp.3970-3971) には 5 世紀前半、「後江陵に遊びて辛寺に止り、大に禅法を弘め、化を求むる者三百餘に達せりと云う」とある。
- 55) 中村元 (1975) p.325 参照。
- 56) 廣澤隆之 (2002) p.216 参照。

- 57) 船岡誠 (1987) p.4 参照。
- 58) 只管打坐はひたすら坐禅することや、黙って何も考えずに坐ることを指す。中村元 (2001) 『広説仏教語大辞典』 p.626 参照。
- 59) 鈴木大拙 (1972) pp.26-27 参照。
- 60) 鈴木大拙 (1972) p.27 参照。
- 61) 鈴木大拙 (1972) pp.68-69。
- 62) 禅と念仏・儒教を融合を試みた人物としては雲棲株宏 (1535-1615) が有名である。
- 63) 鎌倉時代の末期から室町時代にかけて、臨済宗の鎌倉五山や京五山が幕府の外交文章を作成するにともない、そこで漢詩を作る才能が重視され文学が栄えた。
- 64) 雪舟 (1420-1506) は臨済宗相国寺で春林周藤に禅を学び、周文から画法を学んだ。
- 65) 明兆 (1352-1431) は臨済宗東福寺で画法を学び、その作品は足利義持から称讃された。
- 66) 鈴木大拙 (1972) p.25。
- 67) 鈴木大拙 (1972) pp.55-56。
- 68) 渡辺照宏 (1958) p.194 参照。
- 69) 『観無量寿経』の内容は以下である。阿闍世王が父のビンビサーラと母の韋提希を幽閉した。その際に韋提希が釈尊に礼拝すると、釈尊はそこに訪れ、浄土と仏を観想する修行方法を説いた。
- 70) 専修念仏は他の行を修めず、ただひたすら念仏のみを唱えることという。中村元 (2001) 『広説仏教語大辞典』 p.1032 参照。
- 71) 渡辺照宏 (1958) p.199 参照。
- 72) 同上。
- 73) 鈴木大拙 (1972) pp.23-24 参照。
- 74) 中村元 (2001) 『広説仏教語大辞典』 p.157 参照。
- 75) 鈴木大拙 (1972) p.25。
- 76) 自分で修行を行ない、一足飛びに悟りの境地を得ることを説いた教え。中村元 (2001) 『広説仏教語大辞典』 p.1296 の二雙四重では、豎超の例に天台宗を挙げている。
- 77) 自分で修行を行ない、段階を経て悟りの境地を得ることを説いた教え。中村元 (2001) 『広説仏教語大辞典』 p.1296 の二雙四重では、豎出の例に法相宗や三論宗を挙げている。
- 78) 山上證道 (2008) p.164 参照。
- 79) sacen me bhagavan bodhiprāptasyāprameyāsamkhyeyeṣu buddhakṣetreṣu ye sattvā mama nāmadheyam śrutvā tatra buddhakṣetre cittam preṣayeyur upapattaye kuśalamūlāni ca parināmayeyus te ca tatra buddhakṣetre nopapadyerann antaśo daśabhiś cittotpādaparivartaiḥ sthāpayitvānantaryakāriṇaḥ saddharmapratikṣepāvaraṇāvr̥tāmś ca sattvān mā tāvad aham anuttarāṃ samyaksambodhim abhisambudhyeyam | 19 | (Kotatsu Fujita. (2011). p.18)
- 世尊よ。もしも、わたくしが覺りを得た後に、無量・無数の仏国土にいる生ける者どもが、わたくしの名を聞き、その仏国土に生まれたいという心をおこし、いろいろな善根がそのために熟するようにふり向けたとして、そのかれらが―無間業の罪を犯した者どもと、正法(正しい教え)を誹謗するという(煩惱の)障碍に蔽われている者どもとを除いて―たとえ、心をおこすことが十返に過ぎなかったとしても、〔それによって〕その仏国土に生まれないうようなことがあるようであったら、その間はわたくしは、<この上ない正しい覺り>を現に覺ること

がありませんように。(中村元他(1990)(上)、『無量寿経』p.38)

80) 廣澤隆之(2002)p.206 参照。

81) 廣澤隆之(2002)p.245 参照。

参考文献

- Fujita, K. (2011). *Larger and smaller sukhāvativyūha sūtras*. Kyoto: Hozokan.
- Fuller, R. C. (2001). *Spiritual but not religious: Understanding unchurched America*. New York: Oxford University Press.
- Lewis, C. T. & Short, C. (1879). *A Latin dictionary*. New York: Oxford University Press. (Reprint, 1984).
- Suzuki, D. T. (1934). *An introduction to Zen Buddhism*. Kyoto: Eastern Buddhist Society. (Reprint, London: Rider and Company, 1949).
- Suzuki, D. T. (1938). *Zen and Japanese culture*. New Jersey: Princeton University Press. (Reprint, 1973).
- 芥川龍之介(1987)『芥川龍之介全集4』ちくま文庫
- 芦名定道(2007)「日本的靈性とキリスト教」『明治聖徳記念学会紀要』44, 228-239
- 阿満利麿(1996)『日本人はなぜ無宗教なのか』ちくま新書
- 石井研士(2002)『手にとるように宗教がわかる本』かんき出版
- 磯前順一(2003)『近代日本の宗教言説とその系譜』岩波書店
- 井上順孝(2002)『宗教社会学のすすめ』丸善ライブラリー
- 井上洋子(1996)「「神神の微笑」の主題と方法～ハーン、フローベール作品とのかかわりから～」『語文研究』82, 38-48
- 岩井洋(2004)「日本宗教の理解に関する覚書」『関西国際大学 研究紀要』5, 79-89
- 上村建二郎(2010)「日本的スピリチュアリティの定義を求めて—1つの試み」『先端倫理研究』5, 149-171
- 上村建二郎(2012)「スピリチュアリティと意味(meaning)」『先端倫理研究』6, 64-82
- 内田樹・釈徹宗(2010)『現代靈性論』講談社
- NHK 放送文化研究所(2014)「第9回「日本人の意識」調査(2013)結果の概要」(<http://www.nhk.or.jp/bunken/summary/yoron/social/pdf/140520.pdf>)
- 荻原雲来(2012)『梵和大辞典』(新訂版)山喜房仏書林
- 笠井秋生(1968)「芥川龍之介の切支丹物—「神々の微笑」を中心に」『日本文芸論集』1, 57-70
- 葛西健太(2003)「「スピリチュアリティ」を使う人々—普及の試みと標準化の試みをめぐって」湯浅泰雄監修『スピリチュアリティ現在—宗教・倫理・心理の観点』人文書院 pp.123-159
- 櫻尾直樹(2012)「スピリチュアリティとは何か—現代文化の靈性的諸相」櫻尾直樹編『文化と靈性』慶應義塾大学出版会 pp.1-32
- 小泉晋一(2000)「大学生の信仰する宗教と死生観との関連」『日本性格心理学会大会発表論文集』9, 64-65
- 小谷みどり(2007)「日常生活における宗教的行動と意識」『ライフデザインレポート』179, 4-15
- 坂本勉(2009)「イスラームの巡礼」『高等学校 世界史のしおり』2009年1月号, 帝国書院, p.25.

- 島田裕巳（2009）『無宗教こそ日本人の宗教である』角川 one テーマ 21
- 新村出編（2008）『広辞苑』（第6版 DVD-ROM 版）岩波書店
- 鈴木大拙（1972）『日本的靈性』岩波文庫
- 田口麻奈（2011）「芥川龍之介『神神の微笑』と日本文化論—戦後作家による再評価を起点として」『東京大学国文学論集』6, 113-130
- 丹下智香子（2004）「宗教性と死に対する態度」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学』51, 35-49
- 寺沢重法（2013）「現代日本における宗教と社会活動—JGSS 累積データ 2000～2002 の分析から」『日本版総合的社会調査共同研究拠点 研究論文集』13, 129-140
- 中村晋介（2011）「「スピリチュアル・ブーム」をどうとらえるか—福岡県内の大学生を対象とした意識調査より—」『福岡県立大学人間社会学部紀要』19, 19-31
- 中村元（1975）「禅の世界思想史的位置づけ」『禅研究所紀要』4/5, 321-335
- 中村元（2001）『広説仏教語大辞典』（全四巻）東京書籍
- 中村元・早島鏡正・紀野一義訳註（1990）『浄土三部経』（上），改訳発行，岩波文庫
- 中村元・早島鏡正・紀野一義訳註（1990）『浄土三部経』（下），改訳発行，岩波文庫
- 中山和久（2006）「巡礼と現代—関東三十六不動尊霊場を中心として」『不動信仰事典』戒光祥出版 pp.396-421.
- 西久美子（2009）「“宗教的なもの”にひかれる日本人～ISSP 国際比較調査（宗教）から～」『放送研究と調査』2009年5月号, 66-81, (http://www.nhk.or.jp/bunken/summary/research/report/2009_05/090505.pdf)
- ネルケ無方（2014）『日本人に「宗教」は要らない』ベスト新書
- 濱田陽（2001）「「無宗教」への「対話」—チャペル・ウェディングと、日本のキリスト教—」『宗教と社会』7, 23-45
- 廣澤隆之（2002）『図解雑学 仏教』ナツメ社
- 廣澤隆之（2010）『日本の仏教とお経』青春新書
- 船岡誠（1987）『日本禅宗の成立』吉川弘文館
- 船岡誠（1998）「日本的靈性について」『北海道学園大学人文論集』10, 39-53
- 松田文雄（1978）「菩提達磨論—統高僧伝の達磨 その序論—」『印度学仏教学研究』52（26-2）, 84-89
- 蓑輪頭量（2010）「日本仏教におけるスピリチュアリティ」『宗教研究』84（2）, 481-502
- 望月信亨（1960）『望月仏教大辞典』（第3版）世界聖典刊行教会
- 山折哲雄（2000）『仏教用語の基礎知識』角川選書
- 山折哲雄（2007）『近代日本人の宗教意識』岩波現代文庫
- 山上證道（2008）「日本、中国、インドにみる「極楽浄土」思想の展開」『京都産業大学日本文化研究所紀要』12/13, 574-545
- 渡辺照宏（1958）『日本の仏教』岩波新書